

御 挨拶

中村 歌右衛門

皆様、本日はお暑い中をご来場下されまして誠に有難うございます。

「葉月会」も今年は第九回を開催いたす事となりました。中堅、若手俳優の技芸発表の場であり、歌舞伎邦楽若手の勉強発表の場としても益々盛んになって参りましてこんな喜ばしいことはありません。是もひとえに皆様方の温かいご支援の賜と厚く御礼申し上げます。

今年はいへん珍しい発表となりました。河竹黙阿弥作の「廓文庫敷島物語」が本格的に上演されたのは戦前のことになります。ご繁用中にもかかわらず、河竹登志夫先生が、今回特に本編の監修に就いて下されました事は、多くの諸先輩のご指導と共に出演者一同いかばかり励みになりましたことか有り難く厚く御礼を申し上げる次第でございます。

上演の機会に恵まれなかったとは申しながら、なかなか江戸前の狂言でございまして芝居味の濃い面白い世話物でございます。勉強の成果が皆様のご鑑賞に添えるかどうか、どうぞひとつじっくりとご覧下さいますようお願い申し上げます。

邦楽と舞踊の勉強は「鷺娘」をご覧頂きます。

いずれにいたしましても、修業中の者ばかりでございます。積古熱心にめんじてどうぞ年に一度の舞台をみてやって下さいますよう重ねてお願い申し上げます。

尚、毎夏の開催にあたり、惜しみなくお力添え下さいます指導の諸先輩始め関係者各位、殊に今回は舞台演出に総力を上げてお力を与えて下さった国立劇場舞台部の各位並びに劇場関係者の皆様には心より感謝申し上げます。たく、この機会に重ねて御礼申し上げます。

平成二年八月

(伝統歌舞伎保存会会長)

第九回 葉月会 国立劇場大劇場

歌舞伎青年俳優 研修発表会
歌舞伎邦楽若手

尾上 菊之丞 振付
鷺 娘

長唄囃子連中

河竹 黙阿弥 作
河竹 登志夫 監修

廓文庫敷島物語

四幕六場

持田 諒 舞台演出

序 幕 吉原三浦屋広間の場

同 二階部屋の場

同 雲井部屋の場

同 物置責場の場 (竹本連中 出演)

三幕目 深川洲崎海辺の場

大喜利 佛壇前夢の場 (清元連中 出演)

藤間 勘十郎 振付

平成二年八月七日(火)

正午 開演
午後五時 開演

主催 後援 国立 伝統歌舞伎保存会
劇 場

加賀屋 歌 江 小坂部 暢 宏

實川 延 寿 高須 浩 二 隆

市川 鯉 紅 富山 新 秀 樹 也

尾上 梅之丞 原島 康 嘉 男

尾上 梅之助 森井 忠 行 義 彦

中村 歌 松 渡邊 芳 彦

市川 猿十郎 落合 久美子 歩

坂東 橋太郎 柳 沼 久美子

尾上 小 辰 長唄 連 中

尾上 辰 夫 鳴物 連 中

片岡 千次郎 竹本 連 中

松本 幸右衛門 清元 連 中

加賀屋 歌 藏 中村 梅 花

演技指導

尾上菊之丞 振付

鷺

娘

長唄囃子連中

鷺の精 尾上梅之助

ふり積む雪に一面の銀世界、岸辺の葦に立つ柳の木。

「妄執の雲晴れやらぬ朧夜の 恋に迷いしわがこころ

白い振袖に黒襦子の帯をしめた若い女こそ、鷺の精であつた。

「恋に迷いしわが心 忍山 口説の種の恋風が 吹けども傘に

雪もつて積もる思ひは淡雪の 消えてはかなき恋路とや……

女は、もの思わしげに、恋の憂愁の振りをしんみりと踊るう

ち、ぱつと引き抜いて可愛らしい、日もあやな町娘の姿にか

わり、華やかに踊る。

「須磨の浦辺で塩汲むよりも 主の心がとりにくい

「襦子の袴のひだとるよりも 主の心がとりにくい しやほ

んにえ……

「白鷺の 羽風に雪の散りて 花の散りしく景色と見れど あ

たら眺めの雪ぞ散りなん

悩み深い恋の苦しみ、愛慾の煩悩を表現する振りがつづき、

ぱつと引き抜けば鷺の姿、髪を振り乱し、業火に苦しむ物凄

き振りに変わつてゆく……

「あわれみたまえ わが憂き身 かたるも涙なりけらし
と、よろしき見得あつて……」。

尾上梅之助の念願の一つであつた「鷺娘」をはからずも今回の「葉月会」で実現できた恵恩に応えるべく、本人の稽古はまた激しいものでありました。

なんと申しましても、師匠梅幸の「鷺娘」が多くのファンの日にやきついておりますし舞踊会でもしばしば発表されております人気演目です。

本年も尾上菊之丞師の許で汗をかきました。どうぞご声援下さい。

〔演目解説〕

初演は江戸の中頃にあたります宝暦十二年、二世瀬川菊之丞が踊つた変化物四番の中の一つであつたと伝えられています。以後久しく途絶えておりましたものを九代目團十郎がとりあげてから大いに流行して今日に至りました。

本名題は「柳雛諸鳥囀」。当時は「鷺娘」から「うしろ面」次に「傾城」と変化して踊つたといわれ、後に「鷺娘」だけ独立するようになりました。

雪と鷺の精という組み合わせの妙といい、長唄の歌章、曲調の素晴らしさを併せ持った舞台が伝統美の代表作として今も持て囃されているのも頷ける傑作と中せましよう。

河竹黙阿弥 作
河竹登志夫 監修

廓文庫敷島物語

四幕六場

持田 諒 舞台演出

序幕

吉原三浦屋広間の場

二幕目

同 二階部屋
同 雲井部屋の場
同 物置賣場の場

三幕目

深川洲崎海辺の場

大喜利

佛壇前夢の場 (清元連中 出演)

藤間勘十郎 振付

〔配役〕

三浦屋若い者源四郎

同 造り手お爪

同 傾城雲井

同 傾城誰袖

同 新造中窪

同 新造米山

同 新造誰人

同 仲居

同 禿 ゆかり

同 禿 和歌野

三浦屋傾城敷島

三浦屋女房お玉

青木主 鈴

幸右衛門

梅之丞

梅之助

同 紅松

同 高須

同 森井

同 柳沼

同 落合

同 久美子

同 歩

同 歌

同 歌

同 歌

同 歌

同 歌

同 歌

同 歌

同 歌

同 歌

藤代屋十三郎

庄屋作兵衛

刀屋手代三郎

三浦屋若い者喜助

同 若い者

同 若い者

捕手

捕手

非人の兼手

非人の政

代官長井面蔵

船頭熊蔵

代官岩淵郷太夫

洲崎の五平次

千次郎

小猿十郎

原田敏

小島新

富山秀

千葉新

原島康

小坂部

渡邊芳

橋太

辰夫

辰夫

辰夫

辰夫

辰夫

辰夫

辰夫

辰夫

辰夫

【あらすじ】

第一場 三浦屋広間の場

代官の郷太夫、面蔵は庄屋の作兵衛に案内されて相かわらずの吉原通い、お目当ての誰袖を身請けの手附金五十両を持参して広間で宴をひろげているところへ与三郎が依頼の短刀の出物を見せに來た。刀は欲しいし、五十両は身請けの金、思案なげ首の様子に誰袖は愛想を尽かして引き上げてしまった。

五十両を受け取った与三郎はつい浮きうき、新造の中窪に手をとられてとうとう二階部屋にさがってしまった。五十両に目を光らせていた源四郎の罖を与三郎は知るよしもなかった。

第二場 二階部屋の場

中窪の巧みな追いまわしで逃げられぬ与三郎は大事な五十両を布団の下に入れて遊ぶうち、遣り手のお爪が忍び入り五十両を盗んでいった。罖に見事にはまった与三郎が五十両の紛失に気がついた時は後の祭り、騒ぎたてる与三郎を寄つてたかつてなぶつた後、店から叩きだすのはいとも簡単な段取りであった。

後には源四郎とお爪がしめし合せ、枕さがしの罪をいま売れっ子の敷島になすりつけるのが二人の狙い、それというのも源四郎は三浦屋の女主人お玉との情事を敷島に見られてしまった弱みから敷島を亡きものにしようと企んでいるのだった。

第三場 雲井部屋の場

第四場 物置賣場の場

三浦屋の抱え敷島が姉とも慕う雲井に呼ばれて聞かされた話は思いもつかぬ枕さがしの濡れぎぬであった。雲井とてそれを信じて居る訳ではないけれど、敷島の箆笥から客の財布が出てしまつては捨てて置く訳にはいかなくなつていた。敷島はあらぬ冤罪に弁解これつとめたが、源四郎とお爪婆アにひつ立てられて物置部屋に閉じ込められてしまった。残忍な二人は拷問だけではあきたらず、敷島の最愛の娘、禿の和歌野をひきずつて來て白状を追つた。さすがの敷島も和歌野を人質に取られては逃れる術を失い、遂に冤罪を被つて和歌野を逃してやるのだつた。夫十三郎の許へせめて和歌野を逃がし、この仇をとつてくれと託すのだった。一人敷島の残つた物置部屋に再び現れたお爪婆アは、親切ごかしに様子を見にきたと偽り、わざと短刀を落として帰り、敷島に自害の謎、しよせん身の立つ道のない敷島はこの短刀で一命を断つた。すべてを巧の源四郎がこれで万事おわれりと死骸を葛籠に押し込めて居るところへ、そつと顔を覗かせたのは、ぞつとするほど美しいお玉であつた。

【ご案内】

〔廓〕 文庫敷島物語」は、明治2年3月守田座で初演された。当時、双脚を失つた三世田之助の身体でも活躍できる

ように書かれた苦心のあとがうかがわれる。田之助もこれに応えて、お玉と替る演出で努力し、その根性が評判になった。

中途半端な不自由さではない。そのハンデをのりこえた、劇中の責め場、洲崎海岸の舞台うらを想像すれば、きつと「芝居」のようであつたろう。すでに明治になつていたとはいえ、江戸役者の凄さを思い知らされる。

〔黙〕 阿弥54才の作品で脂ののりきつた当時の筆力が全編に溢れている。而し今回の公演ではとても全幕は上演できない。台本の監修に河竹登志夫先生が當つて下され、四幕

六場の形でご了承いただいた。先生はご存知のとおり、原作者の直係にあたる。初演が明治2年で今年が平成2年というめぐり合わせ、原作・監修の並びに直系お二人の名前をみる歴史の経過、なにか不思議な連行を感じざるをえない。

半通し上演では、悪のお玉も源四郎もお爪も健在で、とても懲悪の場面までお見せできない。それでは黙翁の創作意図に沿えぬため、せめて洲崎の場では、お爪が捕手に押さえられる。又、お玉・源四郎の二人は、十三郎と和歌野が仇を討つという台詞を入れて大詰に暗示することにした。

物置賣場 出演

浄瑠璃 竹本葵太夫
三味線 鶴澤泰二郎

作曲 竹本葵太夫
竹本監修 豊澤瑩 緑

敷島物語の上演で多くの難関があつた。中でも責め場の浄瑠璃の資料が全くないのが大きな難関であつた。そこで三味線の第一人者の豊澤瑩緑師匠に相談にいったところ、即座に葵太夫にやらせましよう。と即決。この時、江戸芝居の語りものという大役が決まつた。

葵太夫さんは、国立劇場の竹本研修生の三期卒業

竹本葵太夫 あおいたゆう 本名 柳瀬信吾 二十九才

である。早くも文部大臣芸術選奨の受賞者という才能であり、昭和六十一年度、この時の活躍は義経千本桜・仮名手本忠臣蔵などの語りで人物の感情を的確に表現したと、新人賞を受賞している。今回の創曲は黙阿弥物である。義太夫が上方の音節と密接に結びついている芸能であることを誰よりも知りつくしている本人である。黙阿弥物の義太夫―これを作り、語る舞台が楽しみである。

第五場 深川洲崎の場

安房上総の遠見も美しく、深川洲崎の海辺はすっかり夏景色です。

鎌倉のさる大家の旦那、藤代屋の十三郎は漁師の五平次お供に網漁の一日、どうしたわけかさっぱりで、いつしか話はこのな日に、揚がった一つの葛籠の話、中から出て来た女の死体、袖についていた紋所の、一輪桜に紅葉の模様はまさしく敷島に拵えた部屋着に違いない、その葛籠をどうしてくれたと五平次に、喰ってかかる十三郎でした。

この話を、お堂の中で一部始終、小耳にはさんで驚いたのは、お玉と源四郎でした。

早くも死骸が揚がっては、悪事千里はもう束の間と逃げ支度にかかるところで、しのび三重の合方となり、十三郎、お爪、源四郎、お玉が敷島の霊に呼び寄せられた如く登場してだんまり模様。つづいて、幕引きつけて波の音、花道にかかった舟でほっとした源四郎が汗を拭えば、この時お玉、弧をはねのけて、

「源さん、どうしたい」とにつこり、二人顔見合わせで逃げてゆくのであった。

(若) き日の左団次(二代)が初演のときの源四郎で、まわりの配役は先輩ばかり。

田之助の敷島、仲蔵のお爪という物置きの責め場では、「拙い奴だ」と聞こえよがしに云われて、敷島をいじめるどころか、あべこべにいじめぬかれたという話も伝わっている。ちなみに初演の配役をみると、

澤村田之助(敷島とお玉) 澤村訥升(青木主鈴・藤代屋十三郎)

中村芝翫(魚屋新助) 中村仲蔵(お爪・洲崎五平次)

中村福助(刀屋手代与三郎)

というから、後に大正歌舞伎史を荷った人々の若き横顔がうかがわれる。

(今) の延若さんのお父さんにあたる、二代目延若さんは、敷島・お玉・十三郎の三役を早替りした。大正9年8

月の浪花座で、太夫元の白井さん(白井松次郎氏)から夏狂言の相談をうけて、「乳房榎」をやりたいところですが、またかと云われます。ことしは「敷島怪談」をやりますよう。と答えて白井さんが大喜びする話があります。

このあと延若さんは、もつとも私がやりますと、しきしまじやなくて、葉巻、といわれそうですが……と笑うのですが、この冗談も今では通じませんね。昔、しきしまという煙草があった。太った体の延若さんは自嘲して「あんな太いしきしまなんてあるものか、あれじゃ、葉巻だ」と口わるの先まわりをしたつものの、冗談だったわけです。

藤間勘十郎＝振付

大喜利 佛壇前夢の場

藤間伊佐舞＝振付指導

敷島 歌 江

十三郎 千次郎

和歌野 落合 歩

浄瑠璃

清元志佐雄太夫

清元志寿子太夫

清元志貴太夫

清元佳榮太夫

三味線

清元志寿朗

清元勝三郎

上調子

清元志寿造

清元志寿朗＝補曲

「夢結ぶ千種无路に夜の蝶 翼交せし契りさへ昨日に替る今日の秋

へ身にしむ風に」人を 思えば胸も晴れやらぬ 雨待つ空のうす曇り

敷島に与えた部屋着の片袖がたった一つの形見になった巡り合わせを仇と嘆く十三郎が、憔悴の余り、取り交わした血起請を、輪廻の絆を断たんとして火中に投じます。

「ありし邸の面影も この世を去りて亡き魂の 夫子に引かれ

髣髴と傍の籬に敷島が

「部屋着の儘の立姿

とドロドロになり、花道の出になります。

この夢の場は、原作の全編の中ではちょうど中心柱といった位置にあり、自害した敷島が十三郎に逢いたさの一念で、この佛間に現れる趣向が、静かな中にも華麗な清元節とあいまった幻想美の舞台で評判となりました。今回も、清元志寿朗さんの曲に藤間勘十郎師が振付をして下さいました。

初演の当時は「櫻花雨契雲」(ゆめみぐさあめとなるくも)とよばれた一幕です。

清元志寿朗さんは、清元志寿太夫師の子息で榮三郎、小志寿太夫、志佐雄太夫さんを兄に持ち、恵まれた資質と環境にあつて精進を重ねていらっしゃる事は前回もご紹介いたしました。「敷島物語」の復活上演に当たり、締め括りの難しい大詰めとなった「夢の場」を持ち、実質的には作曲ともいふべき大役でありました。

気と思念の芸術——歌舞伎

持田 諒

(舞台演出)

四世鶴屋南北は大南北と呼ばれたが、比べて孫太郎南北と呼ばれたのは五世鶴屋南北で、その人の下で黙々と作者修業に励んでいた男が居ました。

勝諺藏、後に河竹新七、やがて黙阿弥となる人物です。黙阿弥の筆の流れに、大南北の影をみるのは、こうした経緯によるとも言われています。

中村歌右衛門丈のもとで、長い間芸の修業を重ねている加賀屋歌江さんが、四年前、中村歌右衛門指導による「東海道四谷怪談」で見せたお岩の演技は、伊右衛門の幸右衛門さんとの息も合って、役の性根を踏まえた真摯な芸の伝承だったと見た人は少なくありません。

歌舞伎には、家の芸とか型とがあり、その内部には地球のマグマに似た渦が在って、それは役の本性に立った「思いの念」と役者自身の肉体から発する「気」とが激しくぶつかり合う渦で、それがおのずと外に表れ、形を支えてはじめて観客の心を魅きつける、それが型であり、家の芸とよばれるものではないかと思っています。

そう考えるのは、この「四谷怪談」の時に舞台監督を勤めさせて頂き、実際に指導を受けてゆく歌江さん達の伝承をまじかく見た体験から、芸を継ぐと言うことは、役の思念とおのれの肉体の気の有様をさぐり受けることではないかと、そ

の時は思ったものです。

「葉月会」も「東海道四谷怪談」以後は、歌江さんと成島さんを中心に、埋れた古典の復活に意欲的な活動を続けています。

さて、「廓文庫敷島物語」は通せば長時間の作品です。前半が、敷島を亡き者にしようと企むお玉、お爪、源四郎、三人の結集と成功。後半は、そのエネルギー故に内部崩壊していく人間味あふれる葛藤の内に仕返して幕となります。悪人のたくましい動きを追う内にいつの間にか「悪」の文字が消えて「人間」の文字が浮上する黙阿弥作品の傑作です。大きな二つの折れ曲った流れを短い上演時間内にどうまとめるか、苦しいところですが、発端から仕返しまでを幕の内弁当のようにつまみとることだけできました。黙阿弥のセリフを眼目にして、「責め場」を中心にすえ、前に「雲井部屋の場合」、後に「洲崎上手の場合」を生かし、お玉と源四郎が悪企みの成功にはくそ笑む舟の引込みで大きな流れを止め、敷島の想い人である十三郎が仏壇前でみる「夢の場」を、敷島の思いの晴れた劇構成の晴れを重ねて大喜利としました。

尾上梅花師の演技指導の下、出演者、関係者、同の気と思念が、歌舞伎をどう形造って下さるのか、新しい勉強の場を与えて下さった方々に感謝しつつ稽古に入っています。

大道具 小道具が照明に輝き

美しい衣裳 かつらに飾られた

役者の熱演 その奥に 廣がりに

上にかかげた分野の第一人者が

それぞれに 無言の支え――

そして始めてご覧頂ける――芝居

であります 古典演技の指導に

梅花師 竹本作曲の葵太夫さん

黒みす音楽は政吉次師 清元作曲

の志寿朗さん 鳴物の太左之助

さん 大詰夢の場の 振付指導に

藤間伊佐舞さん そして舞台空間

に新機軸を窮う演出の持田さん――

まだまだありますが 代表的な

分野だけでこれだけのエネルギー

の結集がありました 明治から

平成へ――百二十年の継承です。

江戸 守田 座

河竹黙阿弥＝作

河竹登志夫＝監修
藤間勘十郎＝振付

東京 国立劇場

平成 2 年

復活

初演

明治 2 年

三世 田之助他

廓文庫敷島物語

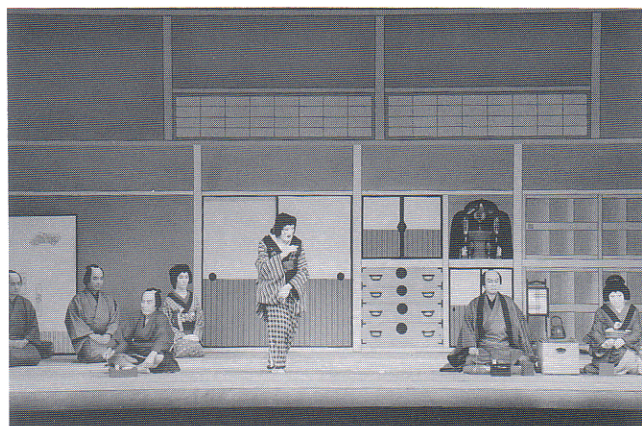
くわ ぶん こ しき しま もの がたり

葉 月 会

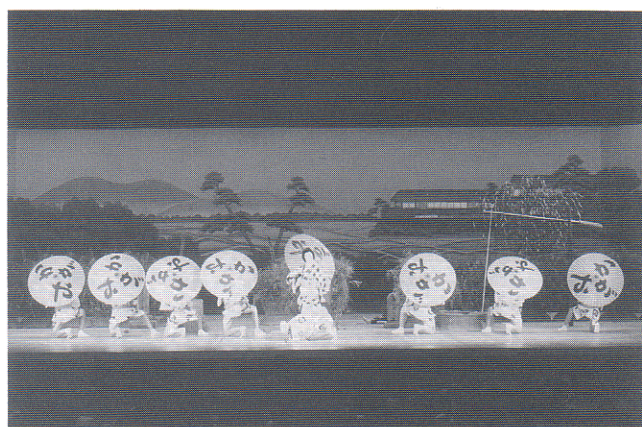
演技指導	中村 梅花
竹本作曲	竹 本 葵太夫
長唄附帳	稀音家 政吉次
清元補曲	清 元 志寿朗
鳴物作調	望月 太左之助
振付指導	藤 間 伊佐舞
舞台演出	持 田 諒



「切られお富」 薩埵峠一ツ家の場
お 富＝歌 江
蝙蝠安＝幸右衛門



「切られお富」 赤間屋奥座敷の場
赤間源左衛門＝駒 助 切られお富＝歌 江
女 房 お 滝＝藤 車 蝙蝠 安＝幸右衛門



「切られお富」 狐ヶ崎畜生塚の場
切られお富＝歌 江

平成 1.8.8

年に一度八月に研修発表をする「葉月会」は昨夏の第八回で「切られお富」を上演、他に舞踊「道行詞甘替」「二人椀久」を発表いたしました。
ご覧の皆様には想い出のアルバムとして、お越しになれなかった皆様のためには舞台写真集としてご披露申し上げます。

想い出の舞台

想い出の舞台

想い出の舞台

(撮影 石井雅子)



「道行詞甘替」 桜 丸＝幸右衛門
苅 屋 姫＝歌 次
斎世の君＝富 二 朗



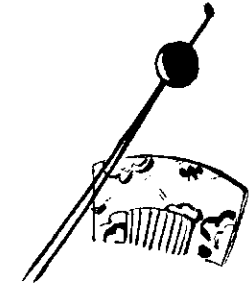
「二人椀久」 椀屋久兵衛＝梅之助
松 山 太 夫＝梅之丞



「切られお富」 大喜利「穂色於富與三郎」
お 富＝歌 江
井筒與三郎＝勘之丞



歌舞伎芝居クイズ



幕間に おたのしみ 下さい。

第1段階より 第5段階まで

順に少しずつ むずかしく なって
ゆきます。ぜひ挑戦してみてください。

例題

ヒント

答

お姫様の髪が逆立つ芝居

毛 抜

〔第1段階〕

1	虎を書き消す芝居
2	雛の道具が川を渡る芝居
3	鎧びつの中に死んだ筈の人間が入っている芝居
4	番頭が白粉（おしろい）をぬられる芝居
5	どくろが川を流れてくる芝居

〔第2段階〕

6	片袖を見せ合う芝居
7	子供の着物が門口に干してある芝居
8	女が障子に歌を書く芝居
9	ほくろで正体をあらわされる芝居
10	男が塀を乗り越えてくる芝居

〔第3段階〕

11	御大將が桜の木に登る芝居
12	箱の中から草履が出てくる芝居
13	お姫様と腰元が双六をする芝居
14	褒美に陣羽織を貰う芝居
15	奴が毛抜であごひげを抜いている芝居

〔第4段階〕

16	ふんどしを人に貸す芝居
17	箱の中から切り髪が出てくる芝居
18	お姫様が二人で双六をする芝居
19	鼻からどじょうが出てくる芝居
20	ほくろが潰される芝居

〔第5段階〕

21	腕をつなぐと死んだ女が口をきく芝居
22	鷹が片袖をくわえてくる芝居
23	商売道具を川へほうり込む芝居
24	犬に石をぶつける芝居
25	平右衛門がおかるの父親になっている芝居

〔解答は最終ページ〕

解答＝1 吃又、2 古野川、3 熊谷陣屋

4 源氏店、5 かさね、6 弁慶上使、7 毛谷村

8 葛の葉、9 河内山、10 明烏、11 金閣寺、12 鏡山

13 重の井、14 すしや、15 菊畑、16 夏祭、17 馬盃

18 玉三、19 黒手組助六、20 引窓、21 実盛物語

22 関の扉、23 いかけ松、24 丸橋忠弥、25 宵庚申

附 師	鳴 物							三 味 線		長 唄		
稀 音 家	望 月	望 月	柏 月	望 月	望 月	望 月	望 月	松 永	杵 屋	杵 屋	杵 屋	今 藤
政 吉 次	太 喜 二 郎	展 司	扇 次 郎	太 嘉 雄	弘 朗	太 左 治	太 意 之 助	忠 七 郎	勝 三 四 次	六 邦 雄	勝 豊 治	六 郎 三 史
頭 取	狂 言 作 者		上 調 子		三 味 線		浄 瑠 璃		竹 本 監 修		長 唄 指 導	
葛 山 鹿 之 助	竹 柴 吉 松		清 元 志 寿 造		清 元 勝 三 郎		清 元 志 貴 太 夫		清 元 志 佐 雄 太 夫		豊 澤 瑩 緑	
制 作 葉 月 会	河 内 着 肉 店		東 京 鴨 治 床 山 株		日 本 演 劇 衣 裳		金 井 大 道 具 株		美 術 碓 山 喬 康		立 師 加 賀 屋 歌 蔵	
	藤 浪 小 道 具		小 林 演 劇 か つ ら 株		バ シ フ イ ツ ク ア ー ト セ ン タ ー		舞 台 監 督 平 島 東 憲		照 明 富 田 修 好		振 付 指 導 藤 間 伊 佐 舞	
									音 響 切 替 良 光		国 立 劇 場	